

私は昨晚和歌の浦へ泊まりましたが、和歌の浦へ行つて見ると、さがり松だの権現様だの紀三井寺だのいろいろのものがありますが、その中に東洋第一海拔二百尺と書いたエレベーターが宿の裏から高い石山の頂へ絶えず見物を上げたり下げたりしているのを見ました。実は私も動物園の熊のようにあの鉄の格子の檻(おり)の中に入つて山の上へ上げられた一人であります。があれば生活上別段必要のある場所にあるわけでもなければまたそれほど大切な器械でもない、まあ物好きである。ただ上がったたり下がったりするだけである。疑いもなく道楽心の発現で、好奇心兼広告欲も手伝っているかも知れないが、まあ活計(くらし)向きとは関係の少ないものです。これは一例ですが開化が進むにつれてこういう贅沢(ぜいたく)なもの数が殖えてくるのは誰でも認識しないわけに行かないでしょう。しかのみならずこの贅沢が日に増し細くなる。大きなものの中に輪が幾つも出来て漏斗(じょうご)みたようにだんだん深くなる。と同時に今まで気の付かなかつた方面へだんだん発展して範囲が年々広くなる。要するに唯今(ただいま)申し上げた二つの入り乱れたる経路、すなわち出来るだけ労力を節約したいという願望から出てくる種々の發明とか器械力とかいう方面と、できるだけ気儘(きまま)に勢力を費や

したいという娯楽の方面、これが経となり緯となり千変万化錯綜(さくそう)して現今のように混乱した開化という不可思議な現象が出来るのであります。

そこでそういうものを開化とすると、ここに一種妙なパラドックスでもいまいましようか、ちよつと聞くと可笑(おか)しいが、実は誰しも認めなければならぬ現象が起ります。元来なぜ人間が開化の流れに沿うて、以上二種の活力を發現しつつ今日に及んだとかいえば生まれながらそういう傾向をもっていると答えるより外に仕方がない。これを逆に申せば吾人(ごじん)の今日あるは全くこの本来の傾向あるがために外ならぬのであります。なお進んでいうと元の儘(まま)で懷手(ふところ)をしていては生存上どうしても遣(や)り切れぬから、それからそれへと順々に押され押されてかく発展を遂げたと言わなければならぬのです。してみれば古来何千年の労力と歳月を挙げてようやくの事現代の位置まで進んできたのであるからして、いやしくもこの二種類の活力が上代から今に至る長い時間に工夫し得た結果として昔よりも生活が楽になつていなければならぬはずであります。

けれども実際はどうか。打ち明けて申せばお互いの生活ははなは

だ苦しい。昔の人に対して一步も譲らざる苦痛の下に生活しているのだという自覚がお互いにある。否(いな)開化が進めば進むほど競争がますます劇(はげ)しくなって生活はいよいよ困難になるような気がする。なるほど以上二種の活力の猛烈な奮闘で開化はかち得たに相違ない。しかしこの開化は一般に生活の程度が高くなったという意味で、生存の苦痛が比較的柔らげられたというわけではありません。ちょうど小学校の生徒が学問の競争で苦しいのと、大学の学生が学問の競争で苦しいのと、その程度は違うが、比例に至って同じことであるごとく、昔の人間と今の人間がどのくらい幸福の程度において違っているかといえ、あるいは不幸の程度において違っているかといえ、活力消耗活力節約の両工夫において大差はあるかも知れないが、生存競争から生ずる不安や努力に至っては決して昔より楽になっていない。否昔よりかえって苦しくなっているかもしれない。

昔は死ぬか生きるかのために争ったものである。それだけの努力を敢(あ)えてしなければ死んでしまう。已(や)むを得ないからやる。しかのみならず道楽の念はとにかく道楽の途(みち)はまだ開けていなかったから、こうしたい、ああしたいという方角も程度も至って

微弱なもので、たまに足を伸ばしたり手を休めたりして、満足して  
いたくらいのものでらうと思われる。今日は死ぬか生きるかの問題  
は大分超越している。それが変化してむしろ生きるか生きるかとい  
う競争になってしまったのであります。生きるか生きるかというの  
は可笑(おか)しゅうございますが、Aの状態で生きるかBの状態で生  
きるかの問題に腐心しなければならぬという意味であります。

活力節減の方で例を引いてお話をしますと、人力車を挽(ひ)いて渡  
世にするか、または自動車のハンドルを握って暮らすかの競争にな  
ったのであります。どっちを家業にしたって命に別条はないにきま  
っているが、どっちへ行っても労力は同じだとはいわれません。人  
力車を挽くほうが汗がよほど多分に出るでしょう。自動車の御者に  
なってお客を乗せれば——もともと自動車をもつくらいならお客を  
乗せる必要もないが——短い時間で長い所が走れる。糞力(くそぢか  
ら)はちつとも出さないで済む。活力節約の結果楽に仕事が出来る。  
されば自動車のない昔はいざ知らず、いやしくも発明される以上人  
力車は自動車に負けなければならない。負ければ追い付かなければ  
ならない。というわけで、少しでも労力を節減し得て優勢なるもの  
が地平線上に現われてここに一つの波瀾(はらん)を誘うと、ちようど

一種の低気圧と同じ現象が開化の中に起こって、各部の比例がとれ平均が回復されるまでは動揺して已められないのが人間の本来であります。——夏目漱石「現代日本の開化」

問.. 120字・180字程度で要約せよ。